古典落語 第四巻

古典落語

第二期　第四巻

飯島友治編

筑摩書房版

古典落語

第二期　第四巻

昭和四十八年九月二十日初版第一刷発行
昭和五十五年二月二十日初版第三刷発行

編者　飯島友治
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京二九一—七六五一（営業）
二九四—六七一一（編集）
郵便番号　一〇一—九一
振替　東京六—四一二三

印刷所　暁印刷
製本所　矢島製本

函デザイン・落合　茂

（分類）0376（製品）17109（出版社）4604

まえがき

編者

落語ほどやさしい芸はないという、また、落語ほどむずかしい芸もないという。素人芸でも喝采を博するし、腕達者がいつも感銘を与えるとは限らぬからである。扇子一本と手拭一筋で演じ出される空間には、人生の機微が、さわやかな機知とともにあふれ出る。おおらかな人間の営為を、共感の微笑で包むのが落語の世界である。前受けをねらった笑いでうずめられた落語には、この微笑の小味な温もりが伝わりくることがない。旧い時代から庶民生活の哀歓を汲みあげて育まれてきた芸の豊饒さも、現代では感受されぬものとなりつつある。噺の中では田舎者は嘲弄の対象であるが、古典落語の本来の味わいになじめない現代人は、精神的な田舎者となったのであろうか。

古典落語は、正統な後継者をほとんど持たず、落語の背景となる社会的基盤も失い、近い将来、内容や演出の上で大きな変化があろう。磨かれ、刈りこまれて高座にあった芸は、どこまで堪能して味わえたのか。話芸としての洗練された語感も、時代の言葉とともに消えうせる運命にあるのではないか。ここに師匠方のお力添えを得て、先の『古典落語』五巻と合わせ、現存する代表的噺はほとんど全て収録できた。活字の限界の中で、話芸が築きあげてきた深い味わいを、書きとどめたい一念でこの仕事を始めたが、敬愛する三遊亭小圓朝師も今は病の身、師の芸の香は活字では伝うべくもない。

健康がすぐれず、発刊が著しく遅れた。編集部の横田三良氏、面谷哲郎氏の寛大なお励しに、深くお礼を申しあげる。落語が笑いだけのものとならず、人の心の豊かな稔りであらんことを。

凡　例

一、江戸語の発音・抑揚などを、なるべく忠実に再現するために、適宜仮名の使い分けを行ない、特に片仮名の半音を多用した。

〔例〕「それァそうだ」「俺ァ」「何すッだァ」「へェェ」「話ィする」「この野郎ォ」等

また、軽く発音する場合にも片仮名の半音を用いた。

〔例〕「こん畜生」＝強い　「こッ畜生」＝軽い

二、ええの使い分け

〔例〕　ええ　きっかけに強く言う場合。「ええ…今日は」

肯定の返事と念を押す場合。「ええ、そうです」「本当ですよ、ええ」

えゝ　返事の場合。「えゝ、そうです」

えェ　軽い肯定の返事とえを引き延ばす場合。「えェ…そォかい」「えェ、するとなにかい？」

ェえ　聞き返しと語尾を強める場合。「ェえ？　もう済んだかい」「しっかりしろよ、ェえ」

ェェ　軽いきっかけ。「ェェ一席お笑いを……」

三、漢字と仮名を、その意味・内容に従って、適宜使い分けた。

〔例〕餅を一つやろうか　ひとつよろしくお願いします　酒を一杯だけ飲む　人がいっぱいいる

四、音写したとき意味のとりにくい言葉には漢字を用い、また適宜あて字を用いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

〔例〕 本当に・葬式・私・吉原・花魁・情人・相手・俺・懐中・食る等

五、古典落語においては間の取り方が重要とされるが、それを間の程度に従って、「…」「……」「……（長い間）……」を使い分けた。なお、言葉の省略の場合も「……」を用いた。

六、解説および本文の中で用いた記号の使い分けは、次の通り。

「　」＝会話・引用等

『　』＝題名・出典等

（　）＝演者の仕草・ト書等

〃＝諺・和歌・川柳等

〔　〕＝編者による補足・語註・注釈等

〽＝歌曲等を唄う場合

↓＝「……参照」の略

！＝語尾を強める場合

？＝疑問符

七、仕草やト書は、本文の支障にならぬ限り詳しく入れた。なおト書の中で、上手、とは演者の左手、上手後ろは奥座敷・勝手の方向を示し、下手はその反対になる。詳細については、第一巻『千早振る』の「芸談　稽古のために」を参照されたい。

目次

浮世床　三遊亭　圓生　9
牛ほめ　三遊亭　小圓朝　31
初音の鼓　林家　正蔵　47
王子の幇間　桂　文楽　61
もう半分　古今亭　志ん生　73
ろくろっ首　柳家　小さん　85
一人酒盛　三遊亭　圓生　105
目黒のさんま　金原亭　馬生　117
穴泥　林家　正蔵　133
胴取り　三遊亭　小圓朝　147

錦の袈裟　古今亭　志ん生　159
十　徳　春風亭　柳枝　179
寄合酒　蝶花楼　馬楽　191
探偵うどん　三遊亭　小圓朝　209
夢の酒　桂　文楽　221
万金丹　柳　家　小さん　233
中村仲蔵　林　家　正蔵　253
鹿政談　三遊亭　圓生　265
付・芸談　稽古のために
〔巻末〕落語史年表・上（飯島友治）

古典落語

第四卷　第二期

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

浮世床

三遊亭　圓生

〝馬子にも衣装髪かたち〟――髪の形にその人品が結い分けられた、江戸時代末期の髪結床を扱った一席である。式亭三馬の『浮世床』『浮世風呂』は当時の寄席落語に想を得て書かれたものであるが、『浮世床』が著されると、逆に落語のほうにその構想が取り入れられて噺が出来た。この噺にある姉川の合戦を読むくだりも、『浮世床』二編巻之下で通俗三国志をメイ朗読する場面と同じ構想である。

文化・文政以降には、髪結床は浮世床ともいわれたが、客が大勢集まって世間話、即ち浮世話に花を咲かせたところから名づけられたものである。〝日半日息子髪結床に居る〟などの柳句のように、湯屋、床屋は町内の社交的な寄合いの場所であった。ちなみに落語に例をみても、『崇徳院』〔一期第一巻〕『猫久』〔一期第二巻〕では情報交換の場となっている。

『浮世床』は、以前は『片側町』という噺のサゲで演る噺家もあった。親方が剃刀を使いながら芝居噺に夢中になり、客の片鬢を剃り落してしまう――「親方ァしょうがねえなァ、往来が歩けねえ」「当分、片側町をお歩きなさい」というものである。大名屋敷や寺社が八割方の地所を占めていた江戸の町では、道の片側だけに商店などの並んでいる通りが多く、それを片側町と呼んでいた。また、茶屋の裏二階で小便がしたくなり、灰吹を並べるとか、庇間にしたりする演出の泥臭さには上方落語との交流も演出上に感じられる。

さて、この噺の中に壁に向かって鬚絵(?)を描く豪の者が登場するが、当時床屋では髷を結い月代を剃るだけのことが多く、鬚は自分で剃るか毛抜きなるもので一本ずつ抜く者が多かった。鬚絵を描くのも、現代という時代からみれば単にくすぐりのために作られた話とも思えるが、鬚を抜くことが日常事としてあった当時は、鬚で絵を描くという着想の面白さがあった。洒落将棋も、洒落をとばしあうことに意気を感じた江戸っ子の生活態度が知れるし、煙管の悪戯でも日常生活と密着した次元から笑いの種を拾いだしている。こうした点に落語の特徴があるといえるが、同時に時代が移るとその笑いの意味もいつの間にか変わったものとなっていることが知れるのである。

この噺は、床屋の待ち時間の間の面白おかしい出来事を寄せ合せた形式をとっているので、時間を自在に調節でき

る。七、八分であげることもできれば、ツナギ噺として次の演者が楽屋入りするまで引き延ばし、一時間位にも演じられる。そのため噺の切りどころがいろいろあり、それぞれのサゲが考えられている。

例えば――夢の話のところで「誰だ、おれを起したのは……」で切れば「ぶっつけ落」。ヘボ将棋のところなら別にサゲはなく、「…浮世床でございます」と区切りをつける。本文のサゲ「それで床屋〔床畳〕を踏倒に来た」は「ぶっつけ落」である。

床屋 髪結床の略称。江戸の床屋の初めは家康入府の頃、橋のたもとなどで床、つまり縁台式〔後に小屋〕の店を出し、橋番を兼ねて営業した。これが髪結床で、床屋と呼ばれるようになった。江戸時代は坊主と医者を除いて男はすべて髷姿だったので、おしゃれな連中は日髪といって毎日、普通は二～五日毎に床屋へ出かけた。当時は灯火のため不便であり、また髪の寝乱れを気にして、多くは午前中に結髪した。そこでその時刻には町内の連中が集まり、『浮世床』のようなにぎやかさを呈したのである。

天保の頃、床屋には、商家と軒を並べる内床〔千八百余軒〕、道端や橋のたもとに小屋掛式に営業する出床〔六百余軒〕、両国など盛り場に軒を並べる並び床〔数十軒〕の三種があった。内床は普通間口九尺から二間、錨とか奴など屋号に因んだ絵を描いた腰高障子があり、それを開けると奥行三尺の土間、続いて上り框から三尺が板張り、その奥三尺幅が畳敷きであった。

多くの床屋は俗に三人立ちといって、左に親方、中に中床と呼ぶ職人、右に小僧の三人が立って仕事をした。客はまず小僧の所で座布団代りに尻板を敷き、扇子の地紙状の毛受板を両手に持って表向きに腰かけ、元結をハネ〔切る〕てふけをとってもらい、髪の毛をすいてもらって中床の所へ移る。中床は月代と顔を剃り、髷の荒拵え〔仮元結〕をし、更に親方の所へ移って本格的に結ってもらうのである。

当時床屋は湯屋と共に株となっていて、原則として一町内一軒が許可されていた。そのため内床などは売買価格が

三～五百両、稀には千両という非常な高値であった。

また床屋は、天下平定以前に家康の頭を結って一文もらい、その縁故で江戸へ出たのだと標榜して家康公からの一銭職と誇りにしていたという。文化・文政頃の公定料金は二十八文で、毎月十七日を公休日としていた。公休日を持ったのは床屋が初めてで、家康の命日四月十七日に因んだものだが、戦前まではパーマネント屋でもこの日を休みにしていた。

ちょん髷　年寄など髪の少ない者が、ちょんと元結を簡単にかけた髷のこと。侍などの髷は髻の元結を長く巻くのでちょん髷ではないし、相撲取の髷も大銀杏であってちょん髷ではない。髷の種類は、俗に本多百態〔銀杏百態〕といわれるほど多くあった。

洒落将棋　天明から文化文政、天保の初めにかけては、ダジャレが盛んにとばされた時代で、落語の笑いもこの時期に形成された。「材木屋の帳面でキチョウメンだ」というようにシャレのめすことが流行したもので、洒落将棋の言葉遊びはその名残りである。

卯月八日は吉日　釈迦の誕生日で灌仏会が催される。桜、海棠、椿などの花で屋根を葺いた花御堂の中の一尺位の高さの釈尊像に、参詣人が甘茶を灌ぐ。その甘茶で墨をすり、「千早振る卯月八日は吉日よ、かみさけ虫を成敗ぞする」と書いて家の柱に貼ると毒虫の害がないといわれ、町家で行なわれた。

薪屋　江戸時代の燃料は薪と炭で、これを商う薪屋は一町内に一軒位はあった。薪は松、櫟、楢が主で、世田谷、中野、荻窪辺の武蔵野から出た。また地方から船で運ばれ、飯田橋辺には薪の問屋が多く俗に薪河岸とよばれた。〔→二期第二巻『言訳座頭』〕

鬢付油　髷の刷け、鬢、髦などの型を作るために使う油で、今のチックに当たる。他に梳油〔毛につやをつける柔い油、今のポマードに当たる〕がある。

床畳を踏む　畳の芯は糸で締めながら、堅くするために足で強く踏みつける。そこから、畳を作ることをいう。

昔はずいぶん変わった商売があって、猫の蚤をとって歩いたという…今から考えると不思議な稼業でございますが……

「(売り声)猫の蚤とろう……」

なんと言ってな、これで一日の生活ができた。まことに世の中が豊かでございます。

耳の垢の掃除をして歩くという商売がありまして……耳というものは床屋さんへ行くとサービスにやってくれますが、昔はこれを専門に耳の掃除をして歩きました。いちばん高いのが金の耳掻でとります。これは触感がたいへんよろしいんだそうですな。その次になると銀、更に安くなると銅、鉄…最下等は釘の頭でかき廻すというんで…これはまァあぶない仕事で……。

床屋さんでもやりましたが、今はあんまり耳のほうは掃除をしてくれません。代りに温いタオルで顔を(両手で顎の辺を覆い)巻きます。あれはたいへんいいもんで……もっともあッたかいのはよろしいが、熱いこともあって……あたくしの行った床屋で熱いのをのっけられて…驚いたことがある……

「(慌てて右手で顔からタオルをつまみ上げ、肩越しに後ろへ声を張り)熱いな、親方…火傷ォするぜ」

「(正面低めへ、しゃあしゃあと)済いません、熱ゥがしたか?」

「熱いやな」

「そうですか。持てるだけ我慢をしてましたが、あんまり熱いもんですから……」

どうもこれァ酷い床屋があるもんで……こっちの顔へのっけられた日にゃァたまったもんじゃァない。

以前はちょん髷という、海苔巻のようなものを頭の真ン中へのっけておりまして……この時代は大勢若い者がここへ集まって、一日中無駄ッ話でもしていようという。床屋で遊ぶというのはおかしいが……これは四畳半とか六畳ぐらいな小室がありまして、将棋盤に碁盤、貸本のようなものがちゃんと備えつけてある。で、ここへ暇な連中が集まって隅のほうで将棋をさす。その隣りでは本を読んでいる。向こうじゃァ…また、鼻糞をまるめて丸薬の製造なんぞをしている。退屈ンなるとまた、鬚を抜いてる人があります

が、床屋ィ来て鬚を抜かなくったって…うっちゃっときゃァよさそうなもんで。やっぱり癖ンなってると見えて、毛抜きを出してしきりにしかめッ面をして…（毛抜＝扇子を持ち、左手で顎の辺を探りながら抜く仕草）抜いちゃァ…前の壁へ（抜いたのを前へくっつける仕草）くっつけていたのが、いつかこれが…富士の山ができあがった。その下ィ鬚で西行を描いて、もう五、六本あれば杖までできあがろうというところで……

「（右手に毛抜を持ったまま、左手で顎をなで廻し）あ、いけねえ、鬚がなくなっちゃった。弱ったなァ…こうと知ってりゃァ無駄に抜くんじゃなかった。折角ここまで拵えたんだから…〝富士に西行〟だから杖と笠があるといいんだがな……うゥん、惜しいなァ。鼻毛でやっちゃァ汚なくなるしなァ。五、六本鬚が……（ひょいと上手横を見て）」

隣りを見ると鬚ぼうぼうと生やした人が……

「（膝に手をおき、こっくりこっくりと居眠り）……」

「（それを見てにやりとし、毛抜を持った右手をそっとのばして手早く抜く）……」

「（うつらうつらしながら右頬をぴしゃッと叩いて目を開け、上を見廻し）どうも…ひどい蚊ですねえ。もう出てきたねえ…（また、こっくりこっくり）」

一本ずつ抜ってれば蚊の所為になっていたんで……無精をして五、六本かためて引ッこ抜いたんで……

「（右頬押え下手へ）痛ッー　痛えな、なにするんだなァ、この人ァまァ……なんだかちくちくすると思ったら鬚ェ抜いてんのかい」

「どうも済いません……ちょいと拝借を……」

「冗談言っちゃいけないよ、他人の鬚をむやみに拝借するやつがあるかい」

「盗んだのァ初めてだ」

「あたり前だな」

「（下手遠くを見て）おい、誰だい？　向こうの隅でもそもそしてンのァ……薪屋の大将じゃァねえかい？　何をしてンだい、そっちで……？」

「（本＝手拭を掌にのせ、上手へ）ェえ？　…いま本を読んでるン」

「何の本を読んでるン……？」

「戦の本」

「どこの戦？」

「戦争の」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.